

青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか

—— グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成 ——

水 野 将 樹*

青年の友人関係について扱った先行研究の多くはアイデンティティ理論などの視点に基づくトップダウン的なものであり、主体としての青年の認識が扱われることはなかった。そこで、本研究では既存の理論に基づく仮説検証型研究ではなく、あくまで主体である青年自身から得たデータに基づいて知見を得る質的研究、その中でも方法論が整っているグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用して青年が信頼できる友人との関係をどのように捉えているかというリサーチクエスションの下、調査・分析を行った。その際、「信頼」を鍵概念に、「友人」は親友などに限定し、実情に合わせて「青年」の範囲を18～30歳とするなどの工夫をした。学生、フリーター、社会人の男女19名に対し半構造化面接を実施し、得られた発話データをカテゴリーに分類することを通じて分析した。その結果、友人との信頼関係の構造・形成・意味づけについて、6つの仮説的知見を得て、それに基づいて青年の友人との信頼関係認識についての仮説モデルを生成した。研究全体としては、青年は友人との信頼関係を「自分」という存在と不可分に捉えていること、その信頼関係は「安心」を中心とした関係であること、などの示唆が得られた。

キーワード：グラウンデッド・セオリー・アプローチ、質的研究、主体としての青年、友人関係、信頼

問題と目的

近年、わが国の現代青年の友人関係は全般的に「表面的（影山, 1999）」だと指摘されている。「表面的」とは、「お互いの心の深みには立ち入らない」ことを指している。携帯電話やEメールなどの間接的なコミュニケーションが主流となっている現代社会において、こうした指摘は妥当なように思われる。その一方で、心理学の分野では伝統的に青年期を「家族という守られた関係性の中から自立し、社会的存在へと移行していく時期」と捉えており、この時期に友人との信頼関係を築くことの重要性も指摘されている（高木, 1996）。

ここで、青年の友人関係が全般的に表面的になっているという指摘と、伝統的心理学における青年の友人関係には、ずれがあるように思われる。しかし、どちらの指摘も先行研究や調査に基づいた指摘であり、一方が全く間違っているということは考えにくく、「現代の青年の友人関係が実際のところどうなっているのか」という問題が浮かび上がってくる。この問題に対し、心理学研究がどのように貢献し得るかを考える上

で、まず伝統的心理学が青年の友人関係をどのように捉えてきたかを振り返ってみる。

心理学の分野においては、多くの研究が友人関係を扱っており、友人関係を築くことが青年にとってどのように有意義かを論じたものが多く見られる。このような「友人関係が青年にとって果たす機能」という観点からの研究をまとめた松井（1990）は、友人関係の持つ機能として「安定化」・「社会的スキル涵養の機会の提供」・「モデル」の3点を挙げている。しかし、先行研究はいずれも「青年にとって友人関係は大切だ」、「青年期の最大の課題は自我同一性の達成だ」という暗黙の前提が色濃く、主体としての青年自身がどのように友人関係を捉えているのかの検討が不十分であることが指摘されている（宮下, 1995）。

それ以外の観点からの研究としては、「友人関係の発達・変化」という観点からの研究として、例えば友人関係の発達段階を扱った保坂・岡村（1986）、落合・佐藤（1996）、青年の発達に応じて友人概念の変化を検討した楠見・狩野（1986）などがあるが多くはない。また、いずれの研究も「一般的な友人」という構成概念についての議論であり、個別の友人との関係の変化・発達を扱った研究は、筆者の知る限り、楠見（1988）のみであり、現代青年の友人関係を扱う際に有効な参照枠と

* 東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
mm@educhan.p.u-tokyo.ac.jp

なるようなモデルや理論は現状では殆どない。

こうした青年の友人関係を扱った先行研究に見られる問題点をまとめると、①アイデンティティ理論などの既存の理論に基づき、良好な友人関係の構築が有意義だということを前提としたトップダウン的な研究が多いということがまず挙げられる。これら既存の理論は繰り返し確認された有効な枠組みである反面、現象を捉える切り口としては固定したものになりやすく、主体としての青年が実際に友人関係をどう捉えているかは明らかにされていない。その他にも、②個別の友人関係がどのようなプロセスで変化するかを扱ったモデルなどが存在しない、③研究ごとに「友人」など用語の定義がまちまちである、などが指摘できる。

そこでこれらの問題点を鑑み、本研究においては、「主体としての青年」を重視し、「信頼」を鍵概念とした上で、「わが国の現代青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか」を探索的に探ることを目的とする。その際に、問題点の②も考慮し、信頼関係そのものについての認識と併せて、関係の変化についてどう認識しているかということも意識しながら進めることにした。

方 法

方法の選択 前段で指摘した先行研究の問題点③に対し、本研究では、まず「青年」を「18歳～30歳」と定義した。この理由については**研究の枠組み**で後述する。次に「友人」を「信頼できる友人」に限定した。本研究の関心は一般的な友人関係ではなく、高木(1996)が言う信頼関係を築く対象としての個別の友人関係を青年がどのように認識しているか、にあったからである。但し、定義ではなく緩やかな限定にとどめたのは、「信頼できる友人」の定義そのものも青年の主体的な回答から立ち上げるためである。なお、信頼という概念については、山岸(1998, 1999など)による一連の研究があるが、そこで扱われているのは個々人が持つ態度或いは特性としての一般的信頼であり、個別の関係における信頼とは少々異なっている。そして、個別の関係における信頼を扱った研究はあまりないのが現状である(天貝, 2001)。

一方、先行研究の問題点①及び②に対して、本研究では、近年心理学領域でも応用が盛んになってきている質的研究法を採用した。この詳細は次で述べる。

質的研究法の採用 本研究では、その目的と先行研究の問題点を考慮し、質的研究法を採用した。主体としての青年自身の認識や友人関係の変化・プロセスを扱

うには、従来の理論ベースの仮説検証型の方法より、質的研究法の方が適していると判断したからである。

具体的方法としては、依拠すべき理論がない状況下で幅広いデータ収集を可能にし、かつ青年自身の認識を重視するために調査方法としては半構造化面接を採用した。また、分析方法には、インタビュー・データをデータに即した形でまとめ上げていくのに適した方法であることからグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下, GTA)を採用した。この手法には、質的研究法の中で最も手続きが体系化されているという利点もある。

このGTAの中にも幾つものバージョンがあるが、基本的な手続きは共通しており、①データ収集、②データ同士を比較し何らかのカテゴリーを見出す(概念生成)、③データ収集と概念生成を繰り返し、カテゴリーを洗練する(理論的サンプリングと継続的比較分析)、④③の手続きを進める中で、それ以上新しいサンプルを得ても新たな知見が得られない状態(理論的飽和)に達したら、そこで③を終了し、得られたカテゴリー及び、カテゴリー同士の連関から理論・モデルを立ち上げる、というものである。本研究の手続きに関しては、分析手順の明確さから基本的にStrauss & Corbin(1990)に準じ、概念生成などについては木下(1999)のミニ版グラウンデッド・セオリーを参照した。

質的研究の利点は、データそのものを丁寧に扱える点である。この方法では、得られたデータの共通性に基づく最大公約数的な部分と、個別性に基づく最小公倍数的部分を同時に扱うことが可能である。これに対して、量的研究の場合には、抽象された数値を扱うため、共通性の扱いに関しては優れているが、個別性を扱うことがなかなか難しいといえる。しかし、質的研究と量的研究は相補的(Bruner, 1990)であり、そのどちらもが心理学的な現象を捉える上で欠かせない視点だと思われる。量的研究が統制された条件下での客観的分析に基づく方法論であり、実証的な有意性・信頼性・妥当性が基準となるのに対し、質的研究には質的研究の基準がある。質的研究の場合、量的研究では捨象されてしまう「被験者にとってのある事物の意味」など、質的データを扱えることが最大の利点である。従って、その利点を損なわないよう、分析過程が実際のデータに基づいているかどうか(fit)、導かれた仮説やモデルが現実の場面でいかに有効か(work)(木下, 1999)といった点が研究を評価する基準となる。また、量的研究においては信頼性として結果の再現性が重視されるので、例えば評定者間一致率などを算出する手続きがあるが、

質的研究の場合には、一致度を高めようとする手続きが、発話データを素直に分析することの障りになる場合もある。そこで、例えばカテゴリー生成などは、データ自体や手続きの「確実性 (dependability)」によって評価を行う (Kirk & Miller, 1986) ことが勧められている。確実性とはそのデータや結果を「あてにできるか」を指し、確実性を高めるためには、データ記述などを整理し、過程を詳述することが重要と考えられる。本研究においても分析過程を可能な限り詳述するよう努めた。

研究の枠組み 従来の調査研究ではデータの収集と分析が明確に分かれているが、GTA においてはデータ収集と分析を並行して行う。収集したデータを分析し、その結果から新たなデータを収集し (理論的サンプリング)、前のデータから得られた知見と新たなデータを照合して分析する (継続的比較分析) のである。この「収集＋分析」の1セットをステップと呼ぶことにすると、本研究は全体で6つのステップからなっている。

調査の手続き インフォーマント¹はわが国の青年19名 (TABLE 1)。従来の研究では「青年」として「大学生」が選ばれることが殆どだが、青年期の拡大 (遠藤, 2000; 下山, 1998) という指摘を踏まえ、本研究では下山 (1998) の定義に準じ、青年の範囲を「18～30歳」と考えた。インフォーマント (以下, Info.) の属性は大学生とフリーター²を含む社会人である。調査時期は2001年7

月～12月で、調査方法は1人あたり50～90分の半構造化面接であった。面接の場所はInfo.との合意により決定し、面接過程はMD またはテープに録音した。面接・テープ起こしは筆者自身が行った。

半構造化面接に使用した質問項目は**研究過程と結果**の各ステップの欄に記載した。面接中はこれらの項目をガイドとして用い、流れに応じて質問する順番や質問の内容は柔軟に変化させた。Info.の発言をうけて、適宜内容を膨らませた質問も行った。

質問は最初に「最も信頼できる人物 (複数可)」を挙げてもらい、その人物との信頼関係について質問した。人物が複数挙げられた場合には、用意された項目をそれぞれの人物について質問した。「最も信頼できる友人」ではなく「人物」としたのは、青年にとって友人が信頼できる存在として認識されていない可能性を見分ける手続きとしてである。少数のInfo.だとしても、「友人」を挙げるようならば問題はないが、全く挙がらなかったような場合には、むしろ「なぜ友人は重要な信頼対象とならないのか？」という問題意識に基づいて調査を進める方がよいと考えられたからである。

調査にあたっては、研究の主旨・録音すること・データは研究目的でしか使用しないこと・引用する場合には個人を特定できないように改編することを丁寧に説明し、Info.の了解を得た。調査の内容からしても倫理的問題は特にないものと判断した。

また、筆者 (調査時に25歳の男性大学院生) の影響についても細心の注意を払った。具体的にはInfo.の発言を誘導しないよう、質問する際にInfo.自身の言葉遣いを用いるなどの工夫をした。またInfo.には、日常的には筆者と関わりのない人物を選び、匿名性が保たれるよう心がけた。

分析の手続き 面接の逐語記録を起こして発話データとし、以下のように分析を行った。①切片化：ロー・データをそれぞれが単一の意味内容を持つような切片にした。それぞれの切片は、ワープロ原稿にして平均2～3行 (1行40字) であった。②コーディング：それぞれの切片に対し、その内容を表す単語や短い語句 (コード) をつけた。③カテゴリー生成：コーディングされたデータを比較し、似たもの同士をまとめ、そのまともに名前を付けてカテゴリーを生成した。更に内容的に共通の上位概念で括れる複数のカテゴリーを

TABLE 1 インフォーマント一覧

ステップ	No.	年齢	性別	属性	備考	選択基準
1	1	20	男	大学3年	心理系	友人関係などについてよく考えている
	2	21	女	大学4年	心理系	
	3	24	女	大学4年	心理系	
	4	21	男	大学4年	心理系	
2	5	23	女	大学院生	心理系	年齢範囲の拡大
	6	24	男	大学院生	心理系	
	7	20	女	大学2年	文科系	
	8	20	男	大学2年	文科系	
3	9	24	女	社会人	留学	社会文化的背景が別
	10	24	女	社会人	留学	
4	11	19	男	大学2年	文科系	心理学専攻ではない
	12	19	女	大学2年	理科系	
	13	26	男	大学院生	理科系	
5	14	24	男	社会人		学生以外
	15	25	女	社会人		
	16	25	女	フリーター		
6	17	19	女	大学2年	文科系	
	18	20	男	大学2年	文科系	
	19	26	男	大学院生	心理系	

¹ 情報提供者。従来の心理学用語であれば「被面接者・被験者」

² フリーターの定義については、社会的文脈もあり、より厳密な諸論が必要と思われるが、本研究においては学生ではなく、かつ定職を持たないものをフリーターと仮に定義する。

まとめてカテゴリー・グループ（以下、CG）を編成した。④カテゴリーの精緻化：カテゴリー内容やカテゴリー同士の連関に基づき、再編成などを繰り返した。例えば、前のステップでは別々になっていた複数のカテゴリー間にまたがるデータを新しいステップで得たとき、そのデータを利用して複数のカテゴリーを括る上位カテゴリーを作ったり、得られたデータとそれがおかれたロー・データの文脈を考慮することで複数のカテゴリー間に、因果関係や変化の前・後のような連関を見出したりした。そうした手続きにより、個々のカテゴリーの内容をより精緻化するとともに、最初はばらばらに並立していたカテゴリー同士を連関づけた。⑤仮説・モデル生成：カテゴリーを精緻化する中から最終的な仮説を生成し、更にそれらに基づいてモデルを生成した。具体的には、カテゴリーを精緻化する過程で、例えば複数のカテゴリーがある1つのカテゴリーを中核にしてまとめられることがあった場合に、実際の現象もそのカテゴリーが表している概念を用いて捉えるというのではないかという仮説を導いた。また複数のカテゴリーが経時的変化の前・後であるとしたら、実際の現象も時間を経ることである状態から別の状態に変化していくのではないかという仮説を生成した。それ以外にも、データがそのようなカテゴリーとしてまとめられたということを以て仮説を生成した部分もある。モデルは、得られた仮説をまとめて視覚的に表現したものであり、モデルが表現する現象と仮説が表現する現象は基本的に同一である。具体的作業としては、得られたカテゴリーやCGを、仮説を適切に表現するように空間に配置するというものであった。その際、単にカテゴリーを配置するだけでなく、矢印や囲いを利用したり、見やすさを高めるために時間軸を図示するなどの工夫をした。

いずれの段階においても随時データを参照しながら作業を進めることで、分析がデータに基づいているかに注意した。これらの手順は①から⑤へと一方向的に流れていくものではなく、ステップが改まるごとに①～④を繰り返す循環的な作業であった。また、⑤の最終的な仮説などは調査分析が終結した後で生成したが、分析過程においても生成されたカテゴリーなどから、その時点での考察や仮説生成は順次行っていた。

研究過程と結果

質的研究の場合、仮説やモデルが生成される過程が最も重要になる。読者が分析過程を詳しく知ることによって、生成された仮説やモデルの「尤もらしさ」などを追認

できるからである。以下、本研究における仮説とモデルが生成されたプロセスについて触れていく。

本研究はステップ1～6からなり、基本的にInfo.の属性を漸次拡大しながらカテゴリーを生成・洗練していく中で、青年の友人との信頼関係認識についての仮説・モデルを生成するという構成である。但し、ステップ1～3の分析で中核的なカテゴリーが見えてきており、ステップ4～6においては調査・分析の一段落に向けての細かな変更や精緻化が加えられる段階であった。そこで、まずはステップ3までを詳述し、ステップ4～6については加えられた変更点を中心に簡潔にまとめ、最後に生成された仮説やモデルについて再び詳述することにする。

基礎的なカテゴリーの生成 ここでは、ステップ1～3の3つのステップを通じて、青年の友人との信頼関係認識を考える上で基礎となるカテゴリーが生成されるプロセスについて述べる。

ステップ1

①**目的**：先行理論がない中で、実際に青年が信頼できる友人との関係をどう捉えているか理解するための足がかりとなるカテゴリーの生成。

②**インフォーマント**：首都圏国立大学の3・4年生、4名。最初の段階ということで心理学専攻の学生を選んだ。調査に対する抵抗感が少なく、日常生活の中で人間関係などについて考える機会が多いと考えられたからである。また先行研究では「青年」を「大学生」で代表させることが多いことから、最初の段階である本ステップではそれに準じることにした。

③**面接項目**：半構造化面接の際に用いた項目を以下に示した。これらは信頼関係について広く訊ねる項目であった。方法のところで述べた通り、最初に挙げてもらった「最も信頼できる人物」のそれぞれについて、その人物との信頼関係について質問した。

- ・その信頼関係を別の言葉で言い換えるとどうなるか
- ・その信頼関係は自分にとってどのような関係か
- ・その信頼関係が変わるようなことはあったか
- ・その信頼関係がもし壊れたらどうか
- ・他の人との信頼関係と比べたときに違いはあるか

④**分析方法**：切片化したデータをコーディングし、それをまとめてカテゴリーを生成した。なおステップ1～3においては、全ての信頼できる人物についての発言をデータとして分析に使用している。

⑤**結果と考察**：「最も信頼している人物」として、両親や恋人、恩師と並べて、Info.全員が友人を挙げていたことから、青年にとって友人が重要な信頼対象で

はないという可能性は低いと判断し、分析を継続した。

このステップでは、青年の友人との信頼関係を扱う上で嚆矢となるカテゴリーを生成した(TABLE 2)。CGとしては、【関係の変化】・【現在の関係】・【親との関係】という3つが得られた。なお、TABLE 2のカテゴリーの幾つかは、下位カテゴリーを含んでいた。

従来の青年心理学の研究では、友人関係を静的なものとして捉えているものが多い。しかし【関係の変化】というCGが得られたことから、主体としての青年自身は関係を時間軸に沿って変化するものとして捉えており、そうした関係の変化を度外視するのは不適切であることが示唆された。

【現在の関係】というカテゴリーは【安心できる】、【ありのままの自分でいい】など5つの下位カテゴリーから構成されていたが、ステップ1ではそれらカテゴリー同士の明確な連関は見出されなかった。青年自身が現在の関係をどのように認識しているかについては、以降のステップで引き続き検討することにした。

【親との信頼関係】というカテゴリーについては、親との信頼関係がその他の対人関係とは違って特殊な要素(血縁、扶養関係など)を含む、ある部分絶対的なもの

という認識を含んでおり、その信頼関係の特殊性は興味深かったが、本研究ではあくまで青年が「友人との信頼関係」をどう認識しているかを調べるのが目的であったので、以降でこのカテゴリーについて詳細に検討を加えることはせず、代わりにこのカテゴリーが得られたことを、続くステップの質問項目に活用した。

ステップ2

①目的：ステップ1よりもInfo.の属性を拡大し、カテゴリーを洗練すること。その際に、ステップ1で関係認識の中に関係の変化についての認識も含まれていることが窺われたので、ステップ2からは関係の変化ということも意識して進めることとした。

②インフォーマント：大学2年生・大学院生、計4名。まだカテゴリーが安定してはいないことを勘案し、ステップ1と同様の理由からステップ2でもInfo.の属性としては心理学専攻(または心理学の講義を受講している)学生を選択した。

③面接項目：ステップ1の5項目に、「関係の変化」及び、「親との違い」に焦点化した以下の3項目を加えた計8項目を用いた。

・その信頼関係はどのようにしてできたか

TABLE 2 ステップ1で生成されたカテゴリー

カテゴリー・グループ	カテゴリー	発言の引用 (Info. x) は発言者を表している)
関係の変化	前提条件	あんまりしゃべらない人とは、まず仲良くなれないし、仲良くならないと信頼とかいう以前かなって気がしますから。(Info.3)
	関係の深まり	最初けっこう一方的にこっちが聴いてて、なんかのときにこっちの方がいっぱいいっぱいになっちゃって、「今あなたの話は聴けないから」って断ったら、向こうが聴いてくれた、みたいな感じで。そうやって相互的な関係が成立した感じですかね。(Info.3)
	今後の変化	学生のうちはまだいいですけど、お互いがどっちかが仕事始めたりして、毎週遊べるとか、遊ばなくてもこうなんか、何でもなくてもメールするとか、そういうのができなくなっちゃったら、ちょっと変わっちゃうのかなって感じがします。(Info.2)
	関係の維持	なんとなくこう、話すようなこともなく、つていうときでも、それはそれで関係が変わったとかは思わないですね。今は別に話すことないんだ、順調なんじゃん、よかったよかった、みたいな。一度できるとあまり変わらないと思います。(Info.3)
現在の関係	その関係の特殊性	中学とか高校からのまだ続いている友達に関しては信頼できるって思ってますけど、すごいもう絶対に信頼できるって今思っているのはその友だち一人って感じ。(Info.2)
	安心できる	全幅の信頼を置いている人に対しては、安心感は生まれてくると思うし、安心してなければ信頼はできないんじゃないかな。(Info.1)
	相手への理解	表に現れないところまで、相手が何を考えているのか、自分のことをどこまで分かってくれているのか、という部分まで、一方的ですけど理解できたら、それが信頼とか安心とかにつながるんじゃないかって思います。(Info.1)
	ありのままの自分でいい	普通の友だちだったらちょっとこう、うわべみたいのがあるじゃないですか。そういうんじゃないで、その友だちとはすごいダメな自分でも平気、みたいな感じですね。(Info.2)
	普段意識しない	信頼されてるなっていう感じ……なんか当たり前すぎて思いつかないです。具体的に例えばこういうときっていうのはあんまり思いつかない。(Info.2)
親との信頼関係		完璧に信頼感が全部なくなるっていうのは、私が何やっても多分ないと思うんです。例えば私が人殺しとかしても、たぶん、特に母親なんかは、なんかで信じてくれると思うし。(Info.2)

- ・その信頼関係は今後どのようになると思うか
- ・その信頼関係と、親との信頼関係の違いは何か

「関係の変化」に関する2項目は、①目的で述べた通り、青年の友人との信頼関係認識の中に、関係の変化についての認識が含まれていると考えられたので追加した。また、「親との違い」については、ステップ1で、他の対人関係とは違う親との関係の特殊性を示すカテゴリが抽出されたことを受けて加えた。親という具体的な対象との比較により、Info.の回答を促進しうると考えられたからである。

④分析方法：ステップ1とは異なり、前の段階で生成されたカテゴリがあるので、それを利用してステップ2のデータ切片を理解しようとした。無理が生じた切片について、ステップ1のデータも併せて検討し直しカテゴリを再編成したり、場合によっては新たなカテゴリを生成した。(TABLE 3)

⑤結果と考察：「最も信頼している人」として、全員が友人を、多くが親を挙げていた。恋人については意図的に挙げないInfo.がいたことから、本研究では「信頼できる友人」に恋人は含まないことにした。

新しいデータを加えて検討したところ、ステップ1

では漠然とまとまっていた【現在の関係】というCGが、【安心できる】というカテゴリ中心に再編成された。例えば、【相手への理解】というカテゴリに分類されていた“相手のことを理解できたら安心につながる(Info.1)”という内容のデータや、【ありのままの自分でいい】というカテゴリの“安心感ですね、その友人だと伸び伸びとしていられる(Info.6)”という内容のデータなどが、いずれも【安心できる】というカテゴリにもまたがって分類できること、などをきっかけにした再編成であった。この【安心できる】の下位カテゴリには、新たに【フィーリングが合う】・【気遣い】という2つが生成された。

得られたカテゴリから考察すると、友人との信頼関係にとって「安心できる」ことが重要になっていることが見て取れる。また、【自分にとっての(信頼関係の)意味】というカテゴリが新たに生成されたことから、友人との信頼関係が青年自身に何らかの意味をもって認識されていることが示唆された。

【関係の変化】というCGについて、より年少のInfo.を中心に、信頼関係になる以前の友人関係そのものの形成についての発話やその関係のその後について

TABLE 3 ステップ2で生成されたカテゴリ

カテゴリ・グループ	カテゴリ	発言の引用 (Info.x)は発言者を表している)
関係の変化	関係に影響する要因	苦手なんです、そういうのが。電話をかけたり、自分からやりたいと思わない。(Info.8)
	信頼関係の形成	最初はあまりしゃべらなくて、ちょっと恐かったです。でも中1の終わりくらいから仲良くなって、一緒に帰ったり、一緒にいたりするようになった。(Info.7)
	関係の維持	相手が応えてくれなくてもそれはそれでしょうがないか、って諦めが出ると思う。(Info.5)
現在の関係 (安心できる)	相手への理解	そいつがそういう奴だから、人を傷つけるようなことしないし、なんだろう、いい部分、優しい奴なので、そうですね、信頼。絶対そいつは悪いこととか、人を傷つけるようなことはしないだろうなっていう感じですね。(Info.6)
	ありのままの自分でいい	その子といると、ほんとうの自分でいれるんですよ。だから暗い気分のときも暗い気分でもいいんですよ。それで楽になって。(Info.7)
	フィーリング	一緒にいて気兼ねしなくていいとか、後は、水みたいな人なんで、なんかニュートラルな人なんで、居ても気楽なんです。(Info.7)
	絆の感覚・時間的展望	別れ別れになるだろうけど、多分、それでも一生連絡とか、つながっていけるかなって、そういう意味での信頼はあります。(Info.6)
	普段意識しない	信頼できるな、とは思わないです。何も考えてないっていうか。言われてみると信頼してるっていう。いつもは意識しない。(Info.8)
	気遣い	他の友だちとかにだったら夜中にも電話するけど、その(信頼できる)友人とかには夜中遅くには電話しないようにしようとか、逆にそう思うことがあります。(Info.8)
現在の関係 (その関係の特殊性)	特別な関係	昔からの友だちとでもあんまりそういうことは話さない。その子だけです。(Info.7)
	友人である	価値観とか似てるし、それで話してて趣味とかも似てるんで、感じることも一緒なんです。たいてい。だからけっこうこう、なんかアホな話とかも一緒にできる。(Info.7)
自分にとっての意味		信頼関係がリセットされたとしたらやってけない。やってけるかもしれないけど、今まで生きてきた俺の大事なもののかなりの部分は消えるだろうなっていう感じですね。(Info.6)

は「よく分からない」という内容の発話が見られた。逆により年長の Info. からの発話には「その関係はその後切れることはない」というような確信ともとれる発話が見られた。これらのデータから、友人との信頼関係認識が、例えばその関係の今後については曖昧で「よく分からない」状態から「壊れない」と強く思える段階まで次第に変化していく可能性が示唆された。

ステップ3

①**目的**：このステップでは、本研究の対象範囲から僅かに外れた属性（社会文化的背景が異なる）を持つ Info. から得たデータを分析することで、わが国の現代青年の信頼できる友人との関係についての認識を、その枠組みの外側から洗練させることを具体的目的とした。これは、継続的にデータを加えつつ比較分析することの1つの意義が「類似性と差異性の最大化」（木下, 1999）にあるということを受けてのものである。本研究の場合、基本的には次第に Info. の属性を拡大しつつカテゴリーを洗練する方法をとっている。しかし、ステップ1・2と続く中で、分析者（＝筆者）のデータを見る視点自体が固定されてしまっている可能性もあるので、それを防ぐための手続きとしてこのステップを導入した。社会文化的背景が異なる極端なデータを参照することで、これまでのカテゴリー及び分析者の視点を見直すことが有効だと考えられたからである。

②**インフォーマント**：社会人2名。Info. はともに高校卒業以来、現在までを海外で過ごしており、海外で就職している。親しい友人関係やその認識にもそうした社会文化的影響が予想された。また、社会的地位についても、ステップ1までが学生だったのに対し、ステップ3で社会人を対象とし、これまでとの差異を大きくすることを意図した。

③**面接項目**：ステップ2と同様の8項目。

④**分析と結果**：ステップ2と同様の分析方法で、ステップ3のデータを分析した結果、【自分の態度】、【信頼と関係の違い】、【文化差の認識】という3つのこれまでになかったカテゴリーを生成した。このうち、【自分の態度】というカテゴリーには、“嘘がない、（自分が相手に）常に向き合ってる（Info.10）”などのように、自分の相手に対する態度について言及したデータが分類されていた。また、【信頼と関係の違い】には、“関係が崩れたからって信頼が崩れることはないと思う（Info.11）”のように関係と信頼が別のものだということを示すデータが分類された。

ステップ3のデータは本研究が直接対象とする範疇を越えた Info. から得られたものであり、直接その

データを用いるわけにはいかないが、どちらの Info. も高校時代までは日本で生活しており、事物の認識などには本研究の対象とする「わが国の青年」と通底する部分があると考えられた。更に、異なる文化や対人関係を経験することで、一般的なわが国の青年が気づきにくい部分に自覚的になっている可能性もあることから、ステップ3で得られたカテゴリーのうち、【自分の態度】・【信頼と関係の違い】という2つを参照して、ステップ1・2の8人のデータを再分析した。

なお、このステップ3で得られたカテゴリーが、海外経験者ならではの特殊性を反映したものである可能性もあったが、もしそうならば他のステップにおいて得られたデータとの間に齟齬が生じ、分析の過程でそれに気づくことができるものと判断した。

⑤**基礎的カテゴリーの生成**：再分析の結果、【関係】、【自分】、【自分にとっての信頼関係】という3つのCGを得た（TABLE 4）。なお「カテゴリー」は階層構造を持つが、TABLE 4では最上位のものをCG、次に大きな単位を「カテゴリー」、その1つ下のまとまりを「下位カテゴリー」として表記した。そして、論文執筆段階からの遡及的命名になるが、この段階で得られたカテゴリーを基礎的カテゴリーと名づけた。というのも、以降のステップでは、カテゴリー編成上の大きな変化というよりは、この基礎的カテゴリーの洗練が中心となったからである。

基礎的カテゴリーは、前述の3つのCGからなるが、【関係】というCGは、(a)【関係の変化】についての認識と、(b)現在の関係についての認識に分かれている。(a)の【関係の変化】には、ゼロの状態から関係が築かれる【形成】と、形成された関係が次第に【深まる】という2つのカテゴリーが含まれている。一方、後者の(b)にあたる、現在の関係についての認識には【安心】という中心的なカテゴリーの他に、安心というほど深い関係ではなく単に友人として【仲がいい】という認識や、安心しつつもどこかに抱える【不安】というカテゴリーが含まれている。【仲がいい】については安心というほどに深い関係ではないことを示唆する言説があったので、【安心】には含めなかった。また、【不安】というカテゴリーは、もともと【安心できる】というステップ2のカテゴリーに含めていたが、“安心できる関係であるが、それでも家族になら言えることでも友人にだと言えないことがある（Info.5）”などの発話が見られたので、【安心】とは別のカテゴリーとした。

【自分】というCGは、【自己についての認識】と【自分の態度】という2つのカテゴリーからなるが、前者

TABLE 4 基礎的カテゴリー

カテゴリー・グループ	カテゴリー	下位カテゴリー
関係	関係の変化	外的な要因
		関係の形成
		関係の深まり
	安心	相手への理解
		ありのままの自分でいい
		フィーリング
		絆の感覚・時間的展望
自分	不安	
	仲がいい	
自分	自己についての認識	自分の性格特性と変化
		自律している
自分にとっての信頼関係	自分の態度	
自分にとっての信頼関係	信頼関係の意味	

は青年自身が自分の性格などについて持っている認識であり、後者は自分の態度は相手と関係なくあるものだという認識である。

最後の【信頼関係の意味】には、自分の人生を振り返ったときにその友人の存在を抜きにできない部分があることへの言及が分類されている。

得られた基礎的カテゴリーを、面接時の質問項目(Info.に「自分」ということを直接想起させる質問は1つしかない)と併せて考えると、青年は信頼関係を客観的な対象として認識しているのではなく、「自分自身」との関わりの中で捉えていることが示唆されたといえるだろう。**最終的なカテゴリーの生成** ステップ4以降では、ステップ3までで生成された基礎的なカテゴリーを精緻化し、仮説的モデルを生成していくことが大きな目的となるが、ここではモデル生成の前段階にあたる最終的なカテゴリーを確定するまでの精緻化作業についてまとめる。

ステップ4～6について、半構造化面接の質問項目はいずれもステップ3と同様であった。但し、ステップ3までの経過から友人が青年にとって重要な信頼対象となりえていると判断し、面接の最初に訊ねていた「最も信頼できる人物」という質問については、「最も信頼できる友人」を訊ねる質問に替えた。それ以外の人物については追加で質問を加えることにした。なお、分析方法はステップ2と同様の方法であった。

ステップ4

①目的：Info.の属性を非心理系に拡大して、カテゴリーを更に洗練すること。

②インフォーマント：心理学専攻でない国立・私立大学生、国立大学院生、計3名

③結果と考察：分析の結果、特に大きなカテゴリー再編の必要は見出されなかった。データは既に生成されていたカテゴリーを用いて分類可能であった。唯一、【自分にとっての信頼関係】という単一のカテゴリーが【大事な思い出】・【関係の文脈】・【意味・意味付け】という3つの下位カテゴリーに細分化された。それまでのステップでは、青年が信頼できる友人との関係に「自分にとっての何らかの意味を見出している」ということだけでまとめていた。つまり、【自分】の認識と【関係】の認識相互作用の結果として【信頼関係の意味】の認識につながるという単純な図式を想定していた。しかし、ステップ4のデータからは、青年が友人との信頼関係を他の対人関係と比較・区別していることへの言及（“親には言わないけど、その友人には言う(Info.7)”）や、現在は認識されていないが、後々何らかの意味付けを与えられるだろう経験（“一生懸命だった部活なので、年中一緒にいた(Info.8)”）などについての言及が見られた。そこで、データに合わせてカテゴリーを細分化させたものである。

但し、この細分化はInfo.を非心理系に拡大したから特に見出されたというわけではないと思われる。というのも、それまでのステップのデータにも、新たに生成したカテゴリーに再分類しなおしたデータがあったからである(TABLE 5)。従って、Info.の属性を非心理系に拡大してもカテゴリーの変化は殆どなかった、と判断した。

TABLE 5 カテゴリーの精緻化の例 (ステップ4)

変更点		
【大事な思い出】 を生成	元になった データ	高校で、やっぱりいつも授業が終わった後で、僕なんかは残って自習してるのがあったんですけど、他にも4、5人くらい残ってる人がいて、その中の一人だったっていうことがあって、で、ただあの、そのときとかに割と僕なんかは勉強のために残ってる筈なのに色々ふざけたりして、それに一番付き合ってくれる人だったかな、っていうのはありますよね。(Info.13)
	変更の理由	その友人との経験があることと、その友人との信頼関係が自分の人生にとって重要であるとする意味付けは別だと考えた。
	データ例	うちの代ってというのが、学年が、部活がまとまって、たぶん、殆どの人がその、うちの代は部活にいい思い出、すごい思い出しかないから、そういうのすごいあれですし、すごい一生懸命やった部活なんで、もう年中一緒にいるようなもんですし、合宿とかで一緒に生活とかもするし、そうですね、そんなのが続いてきてるから、なかなか関係が変わらないのかなと、そんなふうに思いますけど。(Info.8)
【関係の文脈】 を生成	元になった データ	<親と友だちの違いは？>具体的に？親には理解できなさそうな友だち関係のこととか、そうかな、親に言ってもしょうがない。(Info.11) やっぱり親には言えないことっていうのはその人にも言ったりするけれど、逆に友だちに言えないこと、どんなに信頼していても友だちには言えないことが、親には言ったりっていうことがあって、だからやっぱり別なことがありますね。(Info.13)
	変更の理由	その友人との関係の文脈が次第に変化して重要な人物になる、という「重要性」の基準以外に、その他の人間関係の文脈との比較に関する認識が見られたことから、「文脈」を分けることにした。
	データ例	(友人に話すのは) 勉強のこととか、勉強面でこうなったとか、あと恋愛のこととか、そっち系ですね。で、家族のときは、生活に関わるようなこと。(Info.7)

※「データ例」は、ステップ4以前のステップのデータで、新たにこのカテゴリーに再分類されたもの

ステップ5

①目的：Info.の属性拡大によるカテゴリーの洗練。

②インフォーマント：社会人・フリーター計3名。

③結果と考察：これまでと異なる属性のInfo.のデータを分析した。全てのデータ切片が、これまでのステップで生成されたカテゴリーを用いて分類・理解可能であり、カテゴリー変更の必要性はないと判断した。

ステップ6

①目的：ステップ5でカテゴリー変更の必要が認められなかったことから、これまでのステップの確認を目的とした。

②インフォーマント：大学生、大学院生、計3名。

③結果と考察：ステップ5に続き、特にカテゴリー変更の必要性は認められなかった。

ステップ4で僅かな変更を加えた後は、続く2ステップともカテゴリー変更の必要が認められなかった。このことから今回生成したカテゴリーは、少なくともある範囲の青年については、ある程度の安定性があるだろうと判断した。更なる調査により生成したカテゴリーをより広範に拡大する可能性は理論的には「無限」(例えば Flick, 1995 ; 木下, 1999 など) だが、それゆえに重要なのは、研究の目的を照合した上で「限定のための基準を定めること」(Flick, 1995) だと思われる。本研究

の目的は、主体としての現代青年が友人との信頼関係をどう認識しているかについて示唆を得ることだったので、「青年の信頼関係認識を扱う上で有用な枠組みが得られること」ということが1つの基準と言える。そして、ステップ6までの間に、先行研究では指摘されていないような仮説的知見(内容は後述)が複数得られており、実際の青年の友人との信頼関係を捉えるための1つの枠組みを提供し得るものと判断した。また、本研究には現実的な制約³もあった。以上の2点を勘案し本研究においては、先述した「ある程度の安定性」を以て、GTAにおける「理論的飽和」に代え、Info.の追加を終了した。最終的に生成されたカテゴリーについてはTABLE 6・TABLE 7にまとめた。

仮説とモデルの生成 本節では、ここまでのカテゴリー生成・精緻化の作業によって見出された仮説的知見と、それに基づいて生成されたモデルについてまとめる。

見出された仮説的知見 カテゴリーの生成・精緻化を通じ、青年が友人との信頼関係をどのように捉えているかについて6つの仮説的知見が見出された。これらの仮説に対応するロー・データはTABLE 8に載せた。

³ 本研究は、もともと修士論文としてまとめられたものであり、時間・予算・労力などに現実的制約があった。

TABLE 6 最終的に生成されたカテゴリー

カテゴリー・グループ	カテゴリー	下位カテゴリー
関係	関係の変化	外的な要因
		関係の形成
		関係の深まり
	安心	相手への理解
		ありのままの自分でいい
		フィーリング
		絆の感覚・時間的展望
	不安	
	仲がいい	
自分	自己についての認識	自分の性格特性と変化
		自立/自律
	自分の態度	
自分にとっての信頼関係	意味/意味付け	
	大事な思い出	
	関係の文脈	

TABLE 7 最終的なカテゴリーに分類されたデータの例

カテゴリー	発言の引用
外的な要因	・その学年だけ校舎が別っていう変な学校で、それでみんな仲良くなる時期なんだけど、そういうのもあったかもしれない。(Info.16) ・クラスが同じになったっていうのはあるし、それが一番大きいかな。(Info.17)
関係の形成	・はじめて会ったときはあんまりいい印象はもたなかったんだけど、大学の友だちで、しゃべってるうちに段々かな。(Info.15) ・たまたま向こうから話し掛けてきてくれたのがきっかけで、それで色々話してるうちに友だちになれた。(Info.13)
関係の深まり	・(きっかけあり) それまで単なる高校のときの3年間ずっと一緒にのクラスだった友だちという程度だったのが、そこで、ドライブなんてほぼ半日くらいずっと一緒にいたわけですけど、それでいろんなことをお互いに話してみても、それだけ、ただの友だちよりも、より信頼できる親密な関係っていうふうに、ま、色々話すことでなった。(Info.13) ・(きっかけなし、だんだんに) 仲がよく、仲がいい中で、特別に仲がよくなって、どんどん、色んな話していくからそういうの(信頼)が形成されてくからかもしれないです。(Info.6)
相手への理解	・(相手自身) その人は基本的にすごくおとなしくて、やっぱり真面目っていうのはあって、それは周りの誰もが認めるところなんですけど、まあいろいろ、すごく真面目なんだけど、ちょっと外れたような、例えば猥談だとかはあんまり他の人としなないかな。(Info.13) ・(相手自身) 人間的なものとか、とくに多分、そういう人間的なものであると思う。技術だけであるとか、勉強だけできるっていうのがそういう(信頼できる)原因になることはなくて、やっぱりその人間性。(Info.14) ・(相手が自分をどう見ているか) なんていうか、言わなくても分かってくれる。あ、今は機嫌が悪いんだな、とか、あ、今はそうっとしておく方がいいな、とかいうことを彼女は分かってくれる。(Info.16) ・(相手が自分をどう見ているか) 相手が他の人に言わないようなことを言ってくれたときとか、相手が私を信頼してくれてるんだなあっていうことをすごく感じる。(Info.16)
ありのままの自分でいい	・(ありのままでいい) その子といるとほんとうの自分でいられるんですよ。だから暗い気分のときも暗い気分でもいいんですよ。(Info.7) ・(自分を出せる) そういうネガティブな感情っていうのは出しにくいし、で、嬉しいっていう感情もあんまり人に出さないんだけど、そういう人の前でなら出せる。(Info.5)
フィーリング	・ずっと積み重なってくると、ああもしかしてこれってフィーリングが合うってことなのかもしれないって思うようになる。社会に出て自分がどういう人間になりたいかとかそういう発想でもよく似てるし。(Info.15) ・フィーリングっていうか、自分と共通する部分っていうか、そういうお互いに引き寄せられるものがある、と、それが反応するみたいなものなのかもしれない。たぶん、人間に好き嫌いがあるのと一緒に、嫌いな理由が分からないのに嫌いってのあるでしょ？それと似たようなものなのかもしれない。(Info.14)

絆の感覚・時間的展望	・自分がなにかしてて、見ようと思えばきちんとあるし、いてくれるし、だからOKって。だから多分、後ろ向いても変わらない。何年経っても変わらないっていう感じで信頼してる感じなんです。(Info.6) ・例えば、絆の深さとか、あとは心のつながりとかが強い、とかそういうこと。(Info.14)
不安	・仲いいんですけど、暇なときとか、遊ぶのに付き合ってもらったりとかするのは逆に、仲良いとなんか、その友だちはまだ部活とか練習とかもしてるんで、休みの日に引っ張りまわすのも悪いなあとと思って、そういうときは違う大学の友だちを呼んだりするんですね。そういう意味では大学の友だちの方が気楽です。大学の友だちだと夜中にも電話するけど、その友だちとかには夜中遅くに電話しないようにとか、逆にそう思うこともあります。(Info.8) ・自分がこれだけ相手に信頼感をおいているのだから、向こうも自分のことを分かって、心配してくれてるんだろう、っていう双務的な関係であるに違いない、と思いたい。(Info.1)
仲がいい	・一緒にいてやっぱり楽しいなあって思えるとき。楽しさ自体が信頼の表れですかね。(Info.7) ・外でなんかやる、やる時には別にそいつと遊ぶのはそいつと遊ぶのが目的だから、ゲームとか好きでなくてもなんでもよくて、そいつとだから楽しい。(Info.6)
自分の性格特性と変化	・自分の性格によるところもあると思う。自分の弱いところをさらりと出せる性格ではないので、さらりと自分の弱いところも吐けるような性格だとまた違うと思うけど。(Info.19) ・私は、人間それぞれ違うって思ってるから。なんかあの、ベースに、他の人を完璧に理解するって絶対無理っていうのがあるのね。だからそういう意味で無理に触れない部分っていうのかな、ま、違うだろうって割り切ってる部分がある。(Info.15)
自立/自律	・独立っていうか、独自に行動ができるっていうか。全然別なこととしてでも、例えば友だちとだったら、全然別々なんだけどそれが認められる。依存っていうと寄りかかっちゃう感じだと思うんですけど、それとは違う。(Info.2)
自分の態度	・信頼関係っていうのは確認しなきゃいけないものではないのかもしれない。だからある意味、自分がその相手との関係を、信頼関係があると思ってて、それが、相手が、原因とかなんかがあって、相手が離れていっても、そういう関係が崩れたりしても、そういうのを信じるっていうのは信じつづけるっていうのは自分の中で持っているものだし、例えばそういう相手が一時期離れたとしても、自分の中でそういうなんだろう、信頼してる関係は崩れているかもしれないけれど、信頼感とか、そいつを信頼してる気持ちっていうのが変わらなければ、やっぱりそういう意味ではそういう人だからこそ、自分が信頼してるんだと思える。例えば、相手が一時期何かあって自分と仲が悪くなったり、自分と疎遠な関係になっても、そういう何かがつながってるっていうなんか、そういう思いが自分の中に持っているから。(Info.14)
意味・意味付け	・(意味：いざというときに頼れ、自律を支える) いつも一緒にいて、会ってないといけないというのはないけれど、なんかあったときには話せるとか、そういう感じです。(Info.18) ・(意味付け：人生の一部) 少なくとも人生のある部分ではともに過ごしたか、…(中略)…そいつがいたおかげで自分の人生っていうものが楽しい、有意義なものになってるんじゃないかなって思う。(Info.14)
大事な思い出	・部活が一緒とか、辛いときを一緒に乗り切ってるとか、いうことも含まれると思う。(Info.14) ・ほとんどの人が、そのうちの代は部活にいい思い出、すごいいい思い出しかない。(Info.8)
関係の文脈	・(他の関係とは文脈が違う) 家族はやっぱり、保護してくれる存在なんですよ。でもその子と一緒に成長していく存在で、だから全然違います。(Info.7) ・(関係の文脈が自分の人生に近い) 自分の性格についてとか、相手の性格についてとか、自分がどういうふうに生きていきたいとかって細かく話す機会ってあんまりないので、逆にそういう哲学的な部分をもてたり、きちんと分析的な話をする機会を持ってるっていうのは、そういう相手とすること。そういう相手をしないと意味がないと思うから。(Info.15)

まず、友人との信頼関係の構造について、①信頼関係は「関係」だけでなく、「自分」についての認識とも密接に関わっている、②現在の関係は「安心できる」ことを中心にした関係である、という2つの仮説的知見が見出された。①はCGが大きく【自己】と【関係】に分かれたことから、青年の友人との信頼関係認識が、大きく、自己についての認識と関係についての認識に分けられるものと考え、導出した。②は現在の関係についての認識が、【安心】というカテゴリーを中心にまとまったことから導出した。この①及び②の知見は、質的方法を用いたからこそ見出された、本研究の中心的な発見であると思われる。

次に、信頼関係の形成過程について、③信頼関係は「形成」と「深まり」の2段階で形成されていく、④

信頼関係は青年自身の発達に伴って変化する、という2つが見出された。③はカテゴリーとして【形成】と【深まり】の2つが生成されたことから導いた。“クラスが一緒である”などの環境要因によって関係が「形成」され、“席が隣になった”、“行事が一緒に話をする機会があった”などのきっかけから関係が「深まる」という仮説である。④はカテゴリーというよりは、ロー・データの文脈に着目して生成されたものだが、「安心できる」という言及や「自分の人生にとって欠かせない人物だ」というような時間的展望を伴った言説が、年少のInfo.ではあまり出ておらず、年長のInfo.で多く見られたということから導出した仮説である。

更に、主体としての青年が友人との信頼関係につい

TABLE 8 生成された6つの仮説に対応するロー・データとその解釈例

仮説	ロー・データとその解釈例
①信頼関係は「関係」だけでなく、「自分」についての認識とも密接に関わっている	「いつも自分を裏切らないか」というと、そうではない。でもそういうところがあったとしても自分を裏切ることがあっても、別にそれは信頼できないことじゃないかな、って思う。」(Info.5) ⇒相手との「関係」においては裏切られることもあるが、信頼できるかどうかについては、「自分」の態度やあり方も関わってくるので、それだけで信頼できなくなるということにはつながっていないと考えられる。
②現在の関係は「安心できる」ことを中心にした関係である	「人と話してて、でも自分のことを話し始めた時に、すごい安心してくるのかなあ。話し始めるような関係になったときに…(中略)…分かり合ってるような気がして、で、そういう人だと、けっこう安心して話せる。安心と話すことはすごく絡み合ってる気がする。」(Info.5) 「表に表れないところまで、相手が何を考えているのか、自分のことをどこまで分かってくれているのか、という部分まで、一方的ですけど理解できたら、それが信頼とか安心とかにつながるんじゃないかって思います。」(Info.1) ⇒これらは【相手への理解】、【ありのままの自分でいい】など、【関係】というCGに属するカテゴリーに含まれるものだが、いずれも「安心」につながっている点に言及されており、信頼できる相手との関係を捉える上で「安心」という概念が重要だと考えられる。
③信頼関係は「形成」と「深まり」の2段階で形成されていく	「中3のときくらいかな、はっきり普通の友だちよりも仲良しだと思った。＜信頼というのを意識したのは？＞う〜ん、高校のときくらいだと思う。手紙をもらったことがあって、はっきり「信頼」と書いてあったわけじゃないけど、「あ、彼女も私と同じ気持ちなんだ」ってことが分かったとき。」(Info.16) ⇒友だち関係は既にあり、それがきっかけを経て深まっていると考えられる。
④信頼関係は青年自身の発達に伴って変化する	「中学の頃は(信頼関係だとは)感じてないかもしれないです。その、中学であったときには、とにかく仲がいいとは思ってたし、特にその友だちと俺とで遊びに行くのもあれだったし…(中略)…生涯、たぶん、一生付き合えるヤツだになっていうのは、それまでの経験からきてるから、最初は分かっただけでなかったと思います。」(Info.6) ⇒「自分」が発達する中で、「関係」に基づく経験や、関係そのものの意味付けが変化していき、それまでは感じていなかった「信頼」というものを相手との関係に見出すと考えられる。
⑤いざというときに頼れるので自立/自律を支えてくれる	TABLE 7の意味・意味付け～関係の文脈を参照 ⇒「いざというときに頼れる」というふうに関係との【関係】を理解しているが、それが安心につながり、更に「いつも一緒にいなくていい」ということで【自立/自律】につながっていると考えられる。
⑥自分の人生を物語るとき欠かせない一部である	TABLE 7の意味・意味付け～関係の文脈を参照 ⇒⑤のように、困ったら頼れるから自立していられるというだけではなく、【関係】と【自分】についての理解が深まってくると、【自分】という存在の中に相手その【関係】が不可分に含まれてきていることの認識に到ると考えられる。

てどのような意味を見出しているのかについて、⑤いざというときに頼れるので自立/自律を支えてくれる、⑥自分の人生を物語るとき欠かせない一部である、という2つの仮説的知見を見出した。⑤は、内容的に【自分】と【関係】という2つのCGの重なる部分に該当する【自分にとっての信頼関係】というCGが得られたことから導出した。⑥も同様のCGが得られたことから導出したわけだが、それに加えより年長のInfo.のみから、自分の人生にとってのその友人との関係の重要性についての言及が得られたことから、⑤よりも更に信頼関係の意味付けが進んだ状態を表すものと判断し、独立した知見として立てた。

生成されたモデル 得られた仮説的知見を適切に表現しうるように、生成されたカテゴリーをまとめて図示することで本研究における仮説的モデルを生成した(Figure 1)。モデル生成作業は川喜多(1967, 1970)のKJ法A型による図解法などを参考に、カテゴリーやCGを適宜配置した上で、矢印や時間軸などを導入し、図式化するというものであった。なお、モデルが模式的に表現している現象は、基本的に前述の仮説と同様に

青年の友人との信頼関係についての認識であることから、以下ではモデル構成作業について詳述する代わりに、モデルがなぜそのように構成されているのかについて詳述することにする。

モデルの構成だが、まず、仮説的知見の①を反映して、大きく「自分」と「関係」の2つの部分に分かれている。更にそれぞれの部分は、知見③・④を反映し、「発達」という時間軸に沿って変化する矢印の形で表現されている。ここで「時間」とせずにあえて「発達」としたのは、客観的な時間の経過だけではなく、主体としての青年自身の主観的な変化や個人差をも包んだ時間軸として、「発達」という用語がふさわしいと考えられたからである。

この発達の軸にそって破線で表現された「現在の信頼関係」が移動していくが、知見②を反映して、その際の「関係」の認識の中心には「安心」が来ている。また、その現在の関係に至るまでには、知見③にあるように、関係の形成と深まりがある。「関係」についての認識と「自分」についての認識の相互作用が循環矢印で表現されているが、その結果として「自分にと

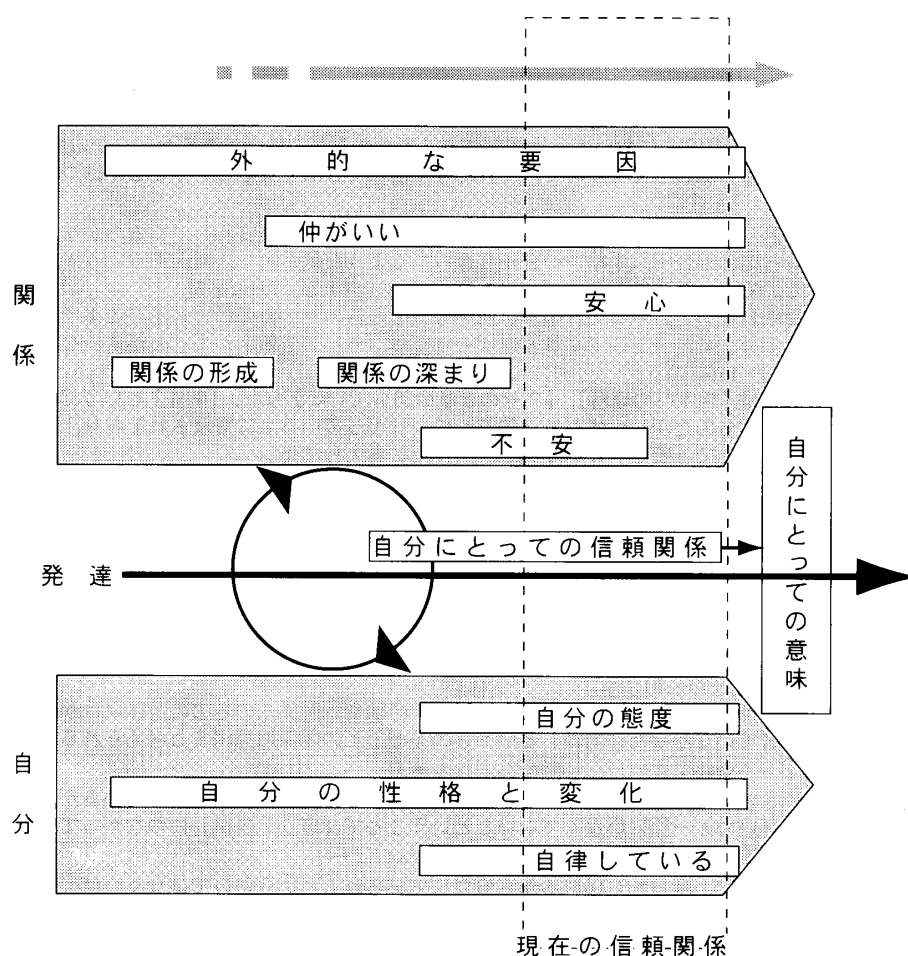


FIGURE 1 青年の信頼できる友人との関係認知のモデル

ての信頼関係」がどのようなものであるか、についての認識が生まれる。もう少し具体的に説明すると、最初は単に相手との「関係」＝「仲がいい」というだけの客観的認識であるのが、次第に⑤のようにその友人との「関係」の持つ「自分」にとっての意味（＝いざというときに頼れる）を認識するようになる。そして、関係を続けていく中で、⑥のように自分の人生を振り返るときには欠かせない存在として相手を認識するようになる、そのようなことを表現したモデルになっている。

それ以外では、カテゴリーとして【安心】と独立して出てきていた【仲がいい】・【不安】なども「関係」の矢印の中に同時に存在している。また、「自分」の矢印の中には自分の性格についての認識のほか、相手とは関係なく存在する「自分の態度」への認識や、「自立/自律している」という認識なども含まれている。

このモデルの利点としては、主体としての青年にとって、「自分」との兼ね合いの中で「関係」が認識されていることをはじめとする知見が反映されている点が挙げられるが、それ以外にも、「現在の信頼関係」の

破線の四角を発達の軸に沿って動かすことで、「まだ安心には達していないが、仲はいい」状態なども表現できる点も1つの利点である。

考察と今後の課題

従来の青年を対象とした心理学研究においては、友人関係が青年自身にとって「どのように認識されているのか」ということは明らかにされてこなかった。これに対し本研究では、「青年自身が友人関係をどう捉えているか」調べることを目的とし、「信頼関係」を鍵概念に、インタビュー調査の言語データを質的に分析することで、前述の6点の仮説的知見を見出し、モデルを生成した。モデルには青年が友人関係を、自分自身と絡み合う形で認識していることが表現されているが、このモデルは、従来の理論からみた友人関係像とは違い、主体としての青年自身の認識を反映していると考えられる。

仮説的知見についての考察 以下では、見出された仮説的知見について理論的な考察を加えてみる。

①**関係の構造について** 関係の構造について明らかになったのが、信頼関係についての認識は「自分」と「関係」の2側面からなる、ということである。換言すれば、青年にとって信頼できる友人との「関係」は、客観的に外部に存在するわけではなく、「自分」というものと不可分に結びついて認識されているということになる。本研究で調査時に用意した質問項目には、Info.自身について直接問う項目はなかったが、得られたデータには、自分自身の性格や一般的な特徴などに対する言及が多く見られた。多くの先行研究では「友人(関係)」という構成概念を想定した調査が重ねられているのだが、実際に青年自身の認識の中では、よりメタ的に、「自分」と「関係」が相互に影響し合う形で認識されているのではないかと、ということが示唆されたといえる。また、関係の構造について明らかになったのは、友人との信頼関係においては「安心できる」ことが重要だという点である。ここで「安心できる」というのは、例えば「相手のことをよく理解している」、「ありのままの自分でいい」、「その関係はこの先も壊れないと思う」などの側面からなる。先行研究においては、青年の友人関係に様々な側面があることは議論されてきているが、青年自身が友人関係をどう認識しているかについては触れられてこなかった。本研究では、主体としての青年に焦点をあてたことで、それらの諸側面が「安心」を中心にまとまっていることを見出したものである。なお「安心できる」ということは、例えば原初的な母子関係などにおいて重要とされる要素だが、現代青年にとって、それが友人との信頼関係においても中心的要素として認識されていることは興味深いと思われる。

②**関係の形成について** 関係の形成過程については、「形成」と「深まり」の2段階があるという仮説が導かれた。個々の友人関係の変化について扱った先行研究としては楠見(1988)があり、理論的に導かれた項目を用いて「関係形成・維持・深化」の3段階を見出している。本研究では、主体としての青年自身の捉え方を重視したことにより、「形成・深まり」の2つの側面があることを見出した。どちらの見解が正しいというものではないが、両者の違いをめぐる1つの推論として、青年自身にとって関係の維持というのはあまり意識化されてはいないということが考えられる。

③**関係の意味について** これまで指摘してきたが、先行研究では、友人関係の意味(意義)を青年のアイデンティティ発達の資源という文脈で捉えているものが多い。つまり、良好な友人関係がアイデンティティ達

成を促進する機能を持つ、という見方である。本研究で見出された知見のうち、「いざというときに頼れるので自立/自律を支えてくれる」という点については先行研究を支持するものだと考えられる。

これに対し、「自分の人生を物語る際に欠かせない一部である」という知見は、一つには友人との「関係」が主観的には「自分」を構成する不可分な要素となっていることを示唆している。しかし、「自分の人生」の捉え方が変化するとその一部である信頼関係の意味付けも影響を受けるということも同時に示唆しており、過去の「関係」が現在の「自己」に寄与するという一方向の影響だけではなく、「自己」の変化によって「関係」の捉え方も変化し得ることも含んだ循環的な知見だと考えられる。これは、信頼関係を変数に縮約しなかった本研究だからこそ得られた豊かな知見だといえるだろう。こうした点について、例えば近年になって研究が始まった「関係論的アイデンティティ」(杉村, 1998; 岡本, 1995)の立場からは、個人の発達が単独で存在する従来型モデルではなく、他者との関係性を内包したモデルの必要性が指摘されている。本研究が見出したモデルは友人との信頼関係についてのものであるが、「関係」を考えるには、「自己」が関わってきているということが示唆されている。どちらかの中に他方が内包されている、というよりもむしろ「自己」と「関係」は不可分に影響しあっているということかもしれない。

総合的な考察 本研究では、主体としての青年自身を重視した上で、GTAという方法論による分析を行い、先行研究では明らかにされてこなかった仮説的知見を見出し、それに基づいたモデルを生成した。これまでわが国では青年の友人関係を扱うモデルは存在せず、本研究がそれを提示した意義は大きいと思われる。また、このモデルは「自分」と「関係」が関わりながら発達するモデルになっており、例えば信頼関係には至っていない単に仲がいい友人関係も表現できるようになっている。青年期だけに閉じてしまわずに生涯発達という観点からモデルをより精緻化することで、研究や臨床の幅広い場面で応用できるようになることが期待される。

今後の課題 本研究には内容面の課題と方法論的課題が残されている。内容面について、本研究では「信頼関係」を鍵概念に、既存の理論に拠らない分析を心がけたが、得られた結果を見ると、例えば考察部分でも触れた関係論的アイデンティティなどの考え方とも関わってくると思われる。今後、そうした理論との対応

も考慮し、モデルをより精緻化することも重要だと思われる。

一方の方法論的課題であるが、まず、本研究は質的研究法を採用した結果、対象の持つ主観的な意味付けなどを丁寧に扱い、これまでにない知見を得られた。しかし、質的研究一般においてしばしば指摘される、結果の一般化可能性の問題が残されている。特に本研究の場合、実際には首都圏の青年のみが対象となっており、本研究で得られた知見が「青年一般」に拡大しうるかについては引き続き検討が不可欠であろう。

また本研究で用いられた GTA という方法については、そもそも分析過程を閉じるための手続きである「理論的飽和」に曖昧な部分が残されている、という点が挙げられている（例えば Flick, 1995）。本研究においては GTA の中でも、より実践的であり、教育心理学領域で決してメジャーではないこの手法の普及に資すると思われたので、木下（1999）の提唱するミニ版グラウンデッド・セオリーに準じた研究を行ったが、GTA に含まれる課題は残されており、今後 GTA やそれに準じた方法論を用いたより多くの研究を積み重ねた上で、そのメリットと課題点についてより詳細な議論をしていくことが必要であろう。

引用文献

- 天貝由美子 2001 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで 新曜社
- Bruner, J. S. 1990 *Acts of meaning*, Cambridge, MA : Harvard University Press. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子（訳）, 意味の復権—フォークサイコロジーに向けて, ミネルヴァ書房
- 遠藤由美 2000 青年の心理, サイエンス社
- Flick, U. 1995 *Qualitative Forschung*. Reinbek bei Hamburg : Rowohlt Verlag. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）, 2002, 質的研究入門—＜人間科学＞のための方法論, 春秋社
- 保坂 亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の治療的意義の検討 心理臨床学研究, **4(1)**, 15-26. (Hosaka, T., & Okamura, T. 1986 Developmental and therapeutic implications in campus encounter groups. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **4(1)**, 15-26.)
- 影山任佐 1999 「空虚な自己」の時代 日本放送出版協会
- 川喜多二郎 1967 発想法 中公新書
- 川喜多二郎 1970 続・発想法 中公新書
- 木下康仁 1999 グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂
- Kirk, J. L., & Miller, M. 1986 *Reliability and validity in qualitative research*. Beverly Hills, CA : Sage.
- 楠見幸子 1988 友人関係の各位相に関わる要因について, 日本グループ・ダイナミックス学会第36回大会研究発表論文集, 21-22
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人概念発達の因子分析的研究, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門) **31(2)**, 97-104. (Kusumi, S., & Kano, S. 1986 Developmental changes in adolescent conceptions of friendship. *Research Bulletin Educational Psychology Section, The Faculty of Education, Kyushu University*, **31(2)**, 97-104.)
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 菊池章夫・斎藤耕二（編）ハンドブック社会化の心理学 川島書店, Pp.283-296.
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係, 落合良行・楠見孝編著 講座生涯発達心理学第4巻 金子書房, Pp.155-184.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化, 教育心理学研究, **44**, 55-65. (Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について, 広島大学教育学部紀要(第二部), **44**, 145-154. (Okamoto, Y. 1995 A review and some considerations on the aspects of “relatedness” in adult identity development. *Bulletin of the Faculty of Education, Hiroshima University Part II*, **44**, 145-154.)
- 下山晴彦 1998 青年期の発達 下山晴彦(編著) 教育心理学II発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会, Pp.183-205.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. 1990 *Basics of qualitative research : Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA : Sage. 南 裕子(監訳)1999 質的研究の基礎: グラウンデッドセオリーの技法と手順 医学書院
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの

形成：関係性の観点からのとらえ直し，発達心理学研究, **9(1)**, 45-55. (Sugimura, K. 1998 Identity formation and relatedness in adolescence. *The Japanese Journal of Developmental Psychology*, **9(1)**, 45-55.)

高木秀明 1996 仲間関係と青年, 久世敏雄編著
1996 青年心理学その変容と多様な発達の軌跡
放送大学教育振興会, Pp.46-56/74-81.

山岸俊男 1998 信頼の構造 こころと社会の進化
ゲーム 東京大学出版会

山岸俊男 1999 安心社会から信頼社会へ—日本型システム
の行方 中公新書

謝 辞

本研究は，東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（2001年度）の一部をまとめなおしたものです。本論文の執筆にあたりご助言いただきました下山晴彦先生（東京大学），能智正博先生（東京女子大学），並びに査読の先生方にお礼申し上げます。その他ご助言いただいた方々にもお礼申し上げます。そして何より，調査に協力してくださった方々に心より感謝いたします。

(2002.9.13 受稿, '04.3.4 受理)

What Do Japanese Youth Think About Their Relationships With Significant Friends ? Generation of a Hypothetical Model From the Grounded Theory Approach

MASAKI MIZUNO (DEPARTMENT OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, UNIVERSITY OF TOKYO)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 170—185

In Japan, most studies of youth's friendships follow a top-down, quantitative, hypothesis-verification approach. The present article, in contrast, uses a qualitative method, the Grounded Theory Approach (GTA), and "what does youth think about their relationship with their significant friends" is the research question (RQ). Under this RQ, data was collected from 19 youth in semi-structured interviews and analyzed by classifying into categories. Through these steps, 6 hypothetical ideas on structure, formation and the meaning of relationships, were revealed and a hypothetical model was generated. The results suggest that Japanese youth consider the core of their relationships to be deeply related to their self and peace of mind.

Key Words : Grounded Theory Approach (GTA), qualitative research, friendship, trust, Japanese youth